

潮来いたこ
(大槻磐溪おおつきばんけい)

烟水茫茫去路遙 暮寒徹骨酒全消
菅騰一枕篷窓夢 過盡潮来十二橋

烟水えんすい 茫々ぼうぼうとして 去路きよろ 遙はるかなり

暮寒ぼかん 骨ほねに 徹てつして 酒さけ 全まったく 消しょうす

菅騰ぼうとうたる 一沈いちちん 篷窓ほうそうの 夢ゆめ

過ぎす 尽つくくす 潮来いたこの 十二橋じゅうにきょう

解説 潮来は、茨城県の常陸利根川の周辺の水郷であり、小舟で水路をめぐる「十二橋めぐり」で名高い。その潮来を訪れた時の作。

語釈 ※烟水Ⅱもやと水と。※茫々Ⅱぼんやりとしていること。※去路Ⅱ過ぎてきた路。ここでは水路。※暮寒Ⅱ夕暮れの冷え込み。※消Ⅱ酒の酔いが醒めること。※騰Ⅱぼんやりしていること。※一沈Ⅱひと眠り。※篷窓夢Ⅱ船中で見る夢。

通釈 もやのかかった一条の水、ふりむけば、いま来た水路が果てもなく続くかと思われる。暮れ方の冷え込みは骨にまで徹して、酒の酔いも全く醒めてしまった。醒めて気づいてみれば、酔ってひと眠りして夢を見ている間に、十二橋はとつくに過ぎてしまっていた。